

論文

戦争の諸側面と「戦争文学」

— 開高健、大江健三郎の作品を中心に —

稲 村 聡

アブストラクト：本稿は開高健と大江健三郎の、1960年代以降に書かれた戦争に関するルポルタージュを考察したものである。大江は広島取材し、核兵器の非人間性を訴え、人間としての「絶対悪」とした。そして「ヒロシマ」を反戦および平和の象徴的概念として提示した。これに対し開高は、ベトナム戦争やその他の戦争取材を通して、戦場に生きるひと、小さな事件、自然の印象などをえがいた。大江の核兵器を絶対悪とするまなざしでは、核を頂点とする戦争をとらえることができる。だが戦争のもうひとつの側面である、通常兵器における犠牲者への視点がみえづらくなる。これを詳細に記したのが開高であり、実際に従軍し、戦争報道では忘れられがちな戦地の仔細な事柄を描いた。二人は同世代の作家として、それぞれの視点で最終戦争・局地戦という異なる側面を描いたのである。1960年から半世紀を経た今日、二人の作品を新たに読みとっていかねばならないだろう。

第一節 本稿の目的

アジア・太平洋戦争終結から15年、朝鮮戦争から10年が過ぎようとしていた1960年は、日米安全保障条約の締結と自然成立という、日本とアメリカとの連携による戦後体制が固まりつつあった。また、沖縄をはじめとして、横須賀、東京の横田基地等、安全保障体制が確立された。1965年にベトナム戦争が激化すると、本土復帰前の沖縄、横須賀から、米軍の飛行機、物資がこぼれ、日本もこの戦争に間接的にではあるが関与することになる。

こうした時期、文学者たちも自らの作品において問題を提起しつつけた。たとえば大江健三郎は日米関係のそもそもの出発点ともいえる敗戦と、それをもたらした広島核兵器について取材をつづけた。また開高健は、アメリカの関与が深くなりはじめたベトナム戦争を現地で取

材し、ルポルタージュのみならず、小説として作品を残した。そして石原慎太郎もまた、ベトナム取材し、政治家としてあらためて身を立てることを決意した¹。

本稿ではほぼ同世代の作家である開高、大江の、戦争に関する作品を振り返りながら、文学者にとっての戦争とは何かを問いなおす。大江に関してはヒロシマに関する作品、開高はベトナム前後とそれ以降の作品をとりあげる。

大江は核兵器、開高は局地戦とゲリラ戦の取材という、おなじアジアの戦争であっても主題としたものは異なる。最終戦争²としての核戦争や核拡散をテーマとした大江と、局地戦、ゲリラ戦という側面を取材した開高の作品を分析することによって、全体としての戦争と、戦争

1 (石原 2013-a)

2 (大江 1965-a : 3)

の細部というふたつの視点をあきらかにする。二人の作家の作品を考察することにより、現代の紛争、戦争とどのように対峙すべきかを、文学作品から提示しようとするものである。

第二節 ——大江とヒロシマ、最終戦争の手段としての核——

はじめに、大江健三郎の仕事をふりかえっておく。安保反対運動を経て、彼は1961年に小説「セヴンティーン」を『文學界』に発表する。同年二月、同じく『文學界』に発表した「政治少年死す」はこの作品の二部という位置付けであるが³、大江は政治への関心から一歩引き、広島に向かうことになる。大江がはじめて広島を訪れたのが1963年だが⁴この取材をもとに書かれたのが『ヒロシマ・ノート』である。

「はじめに」で大江は、広島の被爆者は死者、重傷者、放射線障害に苦しむ人びとだけをさすのではない。幸い健康に毎日を送っている人びともいる、ということに言及する。「反核」を考えると、それによってもたらされる被害のみに視点が集中する。被害を受けていないものに訴えるには、被害を重点的に伝える方が効果的であるからであろう。しかし、そうでない人びとも生きている。被爆をしたが健康に日々を暮らしているこうした人びとが、被爆都市の現在を訴える上で隠されてしまうことになる。

被爆の有無ではない。人口密集地にはじめて投下された原子爆弾の影響は、被害を受けた人びとにのみあるものではない。この作品はヒロシマの人びとについて書かれたものだが、しだ

いに大江のまなざしの範囲が拡大していく。

反核兵器のデモをする人びとがいて、被爆者は身体をおしてスピーチをする。直接政治にかかわらないデモ等に参加する一般の人びとがいるにもかかわらず、彼らと政治に携わる政党組織、日本原水爆禁止協会との連携ができなかった。結果的に広島原水爆禁止協会が、広島で行われた第九回原水爆禁止世界大会の運営を担うこととなった。

政党組織、協会の連携ができなかった背景としては、共産主義国である中国、旧ソビエト連邦の核保持はじめにをどうするか、という問題があったことはいうまでもない。

このように大江は、作品のなかで反核にたいする政治的な側面を描いてはいる。しかし政治を語るときの大江は、辟易としているように読める。大江は政治的なタイプの人間ではないと述べている⁵。被爆者のスピーチもデモも力強いが、政治に翻弄されるように描かれる。

大江は「広島再訪」においても被爆者の証言を積み重ねる。死んでいった人びと、生き残った人びと、さまざまである。しかしこのデモの翌年1964年の広島は静かだという。デモの行進も老人のようだ、という。前年は若々しく活気に満ちていたというのに1年でこうなった。

「広島再訪」のなかで、はじめて広島を訪れた際に出会った被爆者であった宮本定男が亡くなり、彼のスピーチを回想する。大江は被爆者を観念的存在ではなく、凄惨な現実を体験した人びととして彼らをとらえようとする。大江は彼ら被爆者を、かつて使われた人生批評家とい

3 (大江 2018)

4 (大江 1965-a : 2)

5 (大江 1991 : 95)

う訳での「モラリスト」としてとらえる⁶。

大江は、「そして僕は、広島で、人間の最悪の屈辱につらなるものを見だし、そこではじめて、僕がもっとも威厳のある日本人とみなす人びとにも出会ったのであった。」(大江 1965-a : 98) という。

核兵器による攻撃を大江は「最悪の屈辱」という。被爆者の経験、彼ら彼女らを治療する医師たち、核による最終戦争の恐怖から自死を選択してしまった大江の親友⁷。こうした広島の人びとの経験、大江自身の経験と取材によって導き出された定義が、「最悪の屈辱」たる核兵器による被爆である。

また、前述の宮本定男や自らも被爆しながらも医師として治療にあたった重藤文夫といった人びとの活動取材した大江は、「人間の威厳」⁸を見出す。さまざまな人びとのエピソードを克明に記すだけでなく、大江は核兵器による屈辱や復興、モラリストや威厳といったことばを使用しながら、それらを包含するもの、反戦と平和の象徴として「ヒロシマ」をとらえている。

先述したように、大江の友人は自死を遂げる。大江によると、国際政治を専攻していたこの友人は、最終戦争の恐怖に脅え、自らの命を絶った。最終戦争が仮想であるとはいえ、この大江の友人の痛ましい自死は、安保闘争で死亡した樺美智子とともに、時代を象徴した人びとのエピソードのひとつである。

このように見てくると、今日の視点では大江は「核による最終戦争に抵抗しようとした世代」

のようにみえる。それはまた、さまざまな形で戦争を体験した戦中、戦前世代と異なり、実戦においては使用されなかったものの、現実に行いつつある大量破壊兵器の使用による世界の殲滅、という形で姿を現した戦争を大江のいう「想像力」⁹によって「経験」した世代でもある。

以上のように、大江は『ヒロシマ・ノート』において核兵器に対しての、人間の威厳ある活動を記した。同時に、「想像力」をもつ多くの人びとに共感されるよう、ヒロシマを平和や反核の象徴としたのだった。

第三節 絶対悪¹⁰としての核——戦争と核兵器——

広島を離れた大江は、アメリカを訪れる。この体験は「アメリカの百日」として発表された。ここではさらに進んで絶対悪という定義を鮮明にしている。中国が核を持てば、アメリカとフェアになる、それがアメリカ市民のモラルの上で正当なことなのだ、という意見を引いた上で、

しかし現在すでに中国が核武装した以上、アメリカの市民のモラルに、あるいは心理世界に、絶対的な反核兵器の思想の働きかけを行ないうる唯一の存在としては、日本および日本人のみがある、というべきなのではありますまいか？——中略——そしてそれこそが、核兵器所有国としての中国に対して、あらためて加速度的に硬化をつづけるアメリカ市民の心に、いわば第三の声を届けること、もういちどあらためて核兵器の使用を絶対悪とする感覚を取り戻させるための、もっとも人間的な声を届けることなのではありますまいか？ (大江 1965-b : 3)

大江は広島での取材を経験し、日本人として

6 (大江 1965-a : 70)

7 『ヒロシマ・ノート』にも大江の親友の話は登場するが、大江(1963)にこの詳細が記述されている。

8 (大江 1965-a : 92)

9 『ヒロシマ・ノート』においてはこの想像力ということばが多用される。

10 (大江 1965-b : 3)

絶対悪を人間の所業としないわけにはいかなかった。人間による悪という定義によって、人間によっては恢復することができない結果を生み出すのが核兵器ということである。一度使用されると人間の技術など無と化してしまうものが核である。これは広島・長崎にとどまらず、その後の原子力事故の惨状があきらかにしているものでもある。

本稿では詳細には検討しないが、大江はたとえばベトナム戦争についても、沖縄をはじめとする米軍基地によって、日本の協力があったことを批判している。日本は、アジア・太平洋戦争において加害者であったが、ベトナム戦争で間接的であれふたたび加害者になった。このことを明確に意識している、大江の視点を表しているものであろう。核について、大江はつづけてこのように述べる。

人間の悲惨、恥あるいは恥辱、あさましさ、それらすべてを、ただちに逆転して、価値あらしめるためには、そしてそれらの被爆者たちの人間的名誉を、真に恢復するためには、広島が、核兵器全廃の運動のための、もっとも本質的な思想的根幹として威力を発ししなければならない。その威力を、ケロイドのある人間たちと、それをもたないすべての他の人間たちが、こぞって確認しなければならない。その他に広島に被爆者たちをそのもっとも悲惨な死の恐怖から救う、いかなる人間の手段がある？ (大江 1965-a : 100)

大江は被爆によってケロイドを負った少女のエピソードを語りながら、より大きな概念としての「ヒロシマ」や「核」を論じる。そしてこのような問題意識は沖縄へとつながっていく。

なお、ベトナム戦争と沖縄については、開高と同時期に取材した石川文洋が言及している。沖縄ではベトナム戦争を「本土よりももっ

と身近なものとして真剣に考えていた。」(石川 2015:78) という。その要因は主にふたつあり、「自分たちの戦争経験から、同じように地上戦に巻き込まれたベトナムの民衆の悲劇を体で理解できていたから」(石川 2015:78) だとする。二つめとして、「沖縄の基地の動きによって、ベトナム戦争の動きを察知できるからである。」(石川 2015:79) とする。沖縄の人びとは、米軍のB52爆撃機が飛び立った翌日にベトナムの爆撃報道があると、それが沖縄から飛び立ったB52であることを知るとい¹¹。

自分たちの土地、自分の手が直接ベトナム戦争に関係し、それによって、間接的にせよベトナムの民衆が傷つくということに、みずからも傷ついている人が多かった。(石川 2015:79-82)

かつての戦争の体験と、前線基地としての役割を担わされた沖縄は、沖縄の人びとにとってベトナムを身近なものとしたのだ。大江は本土にありながらも取材を重ねた。彼の方法から導きだされたものとしての絶対悪としての核兵器という概念が、間接的にはあれ関与している日本人へ、とくに沖縄以外の本土の人間に問題を提起したのである。

「絶対」ということばには、その他の例外を許さないという響きがある。だが、「絶対悪」とは言えない「悪」としてのそのほかの兵器が使われる戦争そのものが見えづらくなる。ベトナムにおいてもそうであった。

戦争はそういった絶対的な悪としての核によってのみ遂行されるのではない。これは通常兵器、いわば小さな武器と、それによるおびただしい数の負傷者、そして犠牲者が存在するこ

11 (石川 2015:79)

とからも明らかであろう。

ここまでの考察では、大江による「ヒロシマ」、核兵器を絶対的な悪と定義したことについて論じてきた。しかしこの定義による反戦を受け入れられない人びと、あるいは現在進行中の争いについてはどうか。定義するのみでは争いは終わることがないだろう。

今現在、勝利か敗北かをかけて、それも核ではなく通常兵器等で苦しめられている人びとにとって、核は身近な兵器ではないだろう。戦いを継続せざるをえないものはもっと銃器を、銃弾を、地雷を、と思うのではないか。こうした人びとが求めるものは、現実的に恐れられ、必要なのは核ではないのではないか。

むしろ戦争や紛争には、核のように、国家の戦略に極めて重要な位置を占める領域もある。他方、身近ではないこうした国家規模の問題の裏で、人知れず犠牲になる人びともいる。こうした犠牲や事柄は、現代ならば *Twitter* や *Instagram* などの SNS を通じて、写真や動画が現地からリアルタイムに拡散される。

だがそうした情報源に自主的にアクセスしない場合、こうした犠牲者は見過ごされてしまう。核を頂点とするものの、地上の見えない現代のハイテク戦争、高度な情報化、情報発信の個人化をむかえた現代において、こうした見えづらい犠牲をどのように考えたらよいだろうか。

このような疑問が生じるときに鍵となるのが、開高健の一連のベトナム戦争関連作品であると論者は考える。

第四節 小さなヒト，こと，もの，出来事 ——開高健のルポルタージュ——

つぎに、開高健の作品をふりかえろう。開高

は1960年、野間宏、大江健三郎らとともに中国を訪問している¹²。この時に書かれたのが『過去と未来の国々』である。ここで開高は毛沢東、周恩来をはじめとする当時の中国共産党の指導者と対面している。また、郭沫若をはじめとする文学者とも会談している。こうした知識人たちとの会談などよりも、この作品において目立つのは、中国での小さなエピソードである。

コンゴから来たフランス語を話す青年のエピソードが登場する。青年と開高は中国滞在中、あるバーで会ったが、青年は「あんたがた、一発やったじゃないか。一発やったじゃないか……」（開高 1961：81）という。これはアイゼンハワーの訪日延期のことだが、彼は開高に手をのばしてきて握手する。

こちら手を出すと、彼はそれを両手でグッとにぎり、私の手の甲を何度か軽くやわらかく叩いて、
“That’s good for you.”（よくやった）

といって、去っていった。

黒人とわかれて四歩か五歩、あるきだしてから、とつぜん手に海綿のあたたかさがよみがえった。彼の気持がすっかり理解できたように思った。仲間を見つけたと思ってよろこんでいたのだ。

（開高 1961：81）

またある新聞にのせられた「一つの小さなニュース」（開高 1961：90）について、

ローマでイタリア青年共産同盟が東京のニュースを聞いて昂奮し、「イタリアにおけるアメリカのロケット基地反対運動にたちあがる勇気をわれわれは日本人から得た」という旨の声明を発表したというのである。——中略——すべてこの世界に「地方」問題というものがないって、ある局所の疼痛がそのまま全身と心臓にひびく日にわれわれが住んでいることをひしひしと感じさせる。（開高 1961：90）

12 開高健の年譜、書誌については、浦西（1990）を参照した。

日本人から得た勇気というのは、一連の安保反対運動のことである。ここで語られているのは、「地方」の事柄が地球大のものになっていく、というものである。情報、移動手段が発達し、ますます遠くの事柄が「身近」に感じられる今日、この記述は今でも意味ある一節であろう。

しかしここで注意しなければならないのは、開高は「感じさせる」と表現していることだ。主語が「地方」の事柄なのだから、文章はさせられる、と受動態にならなければならないのは当然であろう。「私は感じさせられた」、と書くこともできたのだろうが、この自らを主語とせず、「地方」という事柄に託しているのは、客観的にエピソードを記述しようとしたからだろう。

開高は政治思想や大義、正義といった大きな単位のことは¹³に客観性、冷静をつらぬこうとする。ここでの開高の言説は、「地方」の事柄にも客観的で冷徹な姿勢でのぞんでいる、ということではないだろうか。日本国外の事象に関しては、1960年の時点でその姿勢がすでに現れているといえる。そしてこの小さな出来事の積み重ねによって、開高のルポルタージュは編まれていくのである。

ベトナム戦争が激化したのは1964年8月のトンキン湾事件を経て、米軍の介入が増えた1965年ころとされる。開高は1964年11月から翌年2月、一回目のベトナム取材をしている。その後1968年、1973年と合計三回の取材をおこなった。一回目の取材によるルポルタージュとしては、『朝日ジャーナル』の取材ルポをはじめ、帰国後に書かれた『ベトナム戦記』がある。

その後小説『輝ける闇』、『夏の闇』といった代表作となる作品や、いくつかの短編小説にもベトナム取材が主題として選ばれている。とくに『ベトナム戦記』や、『輝ける闇』をはじめとするいわゆる「闇三部作」を発表した。

本稿では、二回目および三回目の取材後書かれた『サイゴンの十字架』から検討していこう。この作品を論じるのは、前節で考察した大江による大きな概念という視点と対照的な、開高の視点を読みとることができるためである。

けれど、夜ふけの窓ぎわにすわっている私をみだし、とらえてはなさないのは、たくさんの男女の顔である。記憶の薄明の霧のなかに浮沈し、碎けていたり、完全だったり、よこを向いていたり、まっすぐ私を睨（みつ）めていたり、うなだれ気味だったりする顔である。

（開高 1973：88-89）

「たくさんの男女の顔」、とはここではおそらく、ひとくくりにされた「ベトナム人」という集団ではなく、記憶にのこった個別の人びとのことであろう。その表情はさまざまで、そのひとつひとつが開高を捉えてはなさない。

このようなたくさんの個々の人びと、エピソードに対する執着ともいえる開高の関心は、ベトナム戦争を取材した作品以外でも現れている。次節の最初に検討してみよう。

第五節 戦争の諸側面——ベトナム以降の開高——

開高はベトナムだけではなく、ビアフラ戦争、中東での紛争も取材しているが、それをもとにして書かれた作品集『歩く影たち』所収の「戦場の博物誌」で以下のように書いている。ビアフラ戦争についてだが、ナイジェリア政府とビ

13 （小田・開高 1973：143）

アフラがともに赤十字に撤退するよう促していることを語っている。しかし赤十字は撤退するわけにはいかない。ナイジェリア、ビアフラ双方の貧困層、負傷者を支援せざるを得ない。

本節のはじめに、ビアフラ戦争の印象、そして戦争の細部について開高が語る箇所を、長い引用となるが検証しつつ見ていこう。

——中略——しかし、また、ビアフラ側では十二歳の少年から五十七歳までの老人が総動員されていて、住民を戦闘員と非戦闘員に分類することができない状態にあるのだから、赤十字に注射をうたれたためにブッシュで餓死するはずだった少年がよみがえって銃を手にして出かけていって政府軍の兵士を殺し、ひょっとすると自分も死んでしまうかもしれないのである。戦場から帰還する兵士の心身を癒して心ならずも再び戦場へ送り出すのが後方の家族たちの役割なのだから、戦闘員の定義をちょっとひろげれば、家族も戦闘員なのであって、非戦闘員だとはいえないのである。

(開高 1979 : 24)

負傷した戦闘員が再び戦闘に参加するために、家族は戦闘員が回復するようにするのが役割だという。いわゆる「銃後」にいる人びとにとって、戦闘員の家族は、ある思想、イデオロギーといった特定の視点で見れば敵となる。ゆえに、家族も戦闘員となるというのだ。

同頁ではこのようにも発言している。

東西南北、ありとあらゆる戦争はいよいよ全体戦争となるばかりで、いよいよ戦闘員と非戦闘員のけじめがつかなくなるばかりである。

(開高 1979 : 24)

近代前までは戦場が分けられていて、戦場は日常的な空間ではなく、軍人による戦いがつくく特殊な場だったのだ、という。こうした考えはアジア・太平洋戦争によってくつがえされ、日本のみならず世界中、戦場と日常の区別がな

くなる。はからずも1965年に開高が発表した『ベトナム戦記』で開高が現地で言われたように、全土が最前線となる戦争もあるのだ。

南ベトナム解放民族戦線の戦闘員は旧南ベトナムのサイゴンも攻撃対象とし、爆弾テロを繰り返していた。誰が敵かがわからない状況の中で、米軍と南ベトナム政府軍は戦闘をつづけたのであった。このような中でソンミ村の虐殺や、村民全てを殺害するという「事件」が発生したのである。

ビアフラ戦争について、開高はつづける。

——中略——むしろ、赤ン坊から老婆まで一人のこらずがわれらの戦士であると誇らかに揚言するイデオログたちがあらわれ、そういいながら赤ン坊や老婆が殺傷されると敵を”非人間的”とのしる。そこで非人間的な戦闘員が村へ入っていった虫のような老婆について同情して銃口を向けないどころか、うっかりチョコレートなどをさしだすと、老婆はうつむいてそれをうけとり、よちよちと小屋の後ろへ這っていった、指向性地雷のスイッチをひねって、その戦闘員を手も足もけじめがつかないまでに粉砕する。(開高 1979 : 24)

「敵方」の戦闘員の同情が、戦場では死を呼ぶこともある、としている。たとえ同情を寄せる相手が老婆であったとしても、“非人間的”と宣伝された「敵」である戦闘員に対しては、ひとたび戦争状態になると容赦はない。

老婆は犠牲になることなく生きのこることができるだろう。そして、

この老婆が、どうかして街道をよろよろとさまよい歩き、テントに迷いこんで回虫を訴えたら、赤十字はたちどころに薬をあたえることであろう。

(開高 1979 : 24)

国際的な支援機関、ここでは赤十字のことだが、戦闘員ではない一般人を援助せざるをえな

い。全てが戦闘員という定義は、全体戦争という捉え方によって戦争をみようとする視点のみならず、現代の戦争においても適用できるものだろう。紛争においては、戦わざるを得ない人びとがあり、支援の手を生き延びるためにしたたかに利用せざるを得ない。

ここで主要な武器となるのは小さな武器であり、その武器を取るのもまた、思想やイデオロギーに支配されながらも、最小単位の個人なのである。開高が指摘したのは、このような小さな出来事に見えることを見逃してはならない、ということだろう。

開高はまた、『紙の中の戦争』の中でこのようにも発言している。石川達三の『生きてゐる兵隊』についての評論だが、開高は自身が取材したアウシュビッツに関連づけて書いている。引用中に「ベルリン」という地名が登場するのはこのためである。

“かくされた人間性”というものがあって戦場ではじめて本質が赤裸にされるのだとすると、戦争のない場所は“本質”は露出されることがないということになりそうだが、——中略——戦争は政治の延長だが、だから日常の延長なのでもあり、タバコ屋は殺人鬼になるのではなくて、タバコ屋は殺人鬼なのである。殺人鬼は廃墟のベルリンにもどってタバコ屋になるのではなく、もどるのではなく、棍棒のかわりに切手、威嚇のかわりに微笑を抱くだけのことなのである。(開高 1970 : 237)

たしかに総力戦、全体戦争においても、最終兵器としての核兵器の使用によって、おびただしい数の人びとが犠牲となる。しかし、戦争のもうひとつの側面として、上記で引用したような「老婆」や、「タバコ屋」であり「殺人鬼」でもある人びとによって犠牲者が出る。戦争をひきおこすのは政治であるが、戦争を遂行するのは一般人から軍

人まであらゆる人びとが関与しないと続かない。

平穏な暮らしを送っていた老婆は国家によって支給された小さな武器をとり、「敵」とされる兵士めがけて投げつける。日常の仕事としてたばこを売り生活していたタバコ屋は、国家によって支給された自動小銃をもって「敵」とたたかい、あるいは地雷を仕掛けて「敵」の小隊を壊滅状態におこむ。

国の形態、思想は問われない。ひとたび自国に「戦争」という状況が出現したとき、当然のように戦うのである。そのみでは小さな戦力にすぎないのだが、これもまた、戦争の側面の一つであろう。開高のこうした発言は、戦争のマクロ的視点のみでは得られないものではないだろうか。いわば全体戦争を構成する砂つぶのような、しかし戦力にちがいない人びとである。戦闘員以外の、戦争に巻き込まれる可能性のある一般人にとって、きわめて示唆に富むエピソードである。

以上みてきたように、開高は小説を書くために戦争を取材したのではない¹⁴といいながらも、結果としてベトナムで見てきたものが文学的な主題となった。

だが同時に、戦争を取材し、作品とするのが困難であることをも知ってしまった。同年代の作家である石原愼太郎は、1968年にベトナム戦争を取材しているが、石原は「いつかある文学賞の選考会の折に、「君がああ『闇』の三部作を途中であきらめた訳は俺にはわかるな。ベトナムへ行って、そのお陰であの後君はつらいだろう」(石原 2013-a : 21)と述べて、開高の心中を察している発言を残している。石原によれ

14 (開高 1988 : 1058)

ば、「自分の目で見とどけたあの戦争で、戦争という極限状態の中でこそ初めて露呈してくる人間にとっての、さまざまな価値が一見矛盾していながら、実は相対的なものであることを彼は悟っていたと思う。」(石原 2013-a : 21) ともいう。

この、戦争によって露呈される人間の価値が相対的である、ということは、戦場や現地における人びとが、一方からのみでは見ることができないものであるということだろう。ゆえに石原にとっては「ベトナムに平和を！市民連合」をはじめとする反戦運動を批判するのだが、政治的、社会的運動はともかく、小説に関しては「あきらめた」ということは言い過ぎではないだろうか。「つらいだろう」は妥当なのかは知るべくもないが、没後1992年に刊行された『花終る闇』は、未完でありながらもある程度のところまで書き上げていた。

「闇三部作」において描かれていることは「私」の視点を通したベトナムの人びと、米兵、親密な関係にある女性、米兵らのこまかいエピソードである。小説という形においても開高の、小さなひと、こと、ものへの執着が現れているのだ。それはまた、大江の作品では見えてこない、戦争の別の側面もあきらかにしているといえる。

第六節 戦記、戦史と戦争文学

前節であきらかにしたように戦争においては「全体」と「細部」を検討する、という問題が大江と開高の作品の考察から見えてきた。本節では同時代の作家と、彼らの先輩にあたる戦後派文学者、もう少しのちの世代の作家の証言をふまえながら、問題をみていこう。

たとえば戦争を記述した書物としては、戦記や戦史がある。戦記や戦史として残されるのは、確認された事実である。アジア・太平洋戦争においては、日本軍が繰り返し重慶爆撃を行なった、南部仏印進駐が行われた、日本の主要都市で大規模な無差別空襲が行われた、広島、長崎に原爆が落とされたといったものであろう。

ベトナム戦争であれば1964年のトンキン湾事件はアメリカの捏造であった、1965年に北爆が開始され、1968年にソンミ村の虐殺が行われたとか、同年テト攻勢が行われた、そういったものであろう。

戦記や戦史として残らないもの、そうしたこまごまとした、第三者に確認をとることがなかなか難しい事柄、そうしたものを書くことは戦争文学においても、主題のなかの脇役としての役割しかもたないだろう。開高と同時期にベトナムを取材した日野啓三が指摘するように、ベトナム戦争においては米軍のブリーフィングだけを取材するのみでは、ベトナムで起こっていることが伝わらない。日野は「分析よりまず共感が、論理より予感が、数少ない公認の事実より一見あやしい情報の積み重なりが、奇妙なりアリティーをかもし出すのである。」(日野 1966 : 63) と述べる。

日野はベトナム戦争をジャーナリストとして取材したがのちに作家となった。日野の指摘する取材方法は、開高のルポルタージュ、小説の情報収集にも共通したものといえる。

戦争文学が、戦記や戦史に基づいて、それがメインになっているものに関しては、戦争の多層性、多様性をかいまみせるという役割は果たせるだろう。戦争の全体像を見ようとすれば、そのこまごまとしたもののばかりを追ってはい、小さな出来事の羅列に終始することはある。

しかし、戦争は戦記や戦史に残されるものだけではない。戦記や戦史は、当該の戦争が集結したのちに編まれるものであり、現在進行している戦争については、日野のいうように「一見あやしげな」情報も記さざるを得ない。こまごまとした人物のエピソードや、最前線だけではなく、銃後、もっともベトナム戦争においては銃後であるサイゴンも最前線になるのだが、これらの「場」の風景を描写することにより、どこで何が行われたかを知ることができるのだ。歴史として反証可能性はない事柄かもしれない。だが、戦争は兵器と兵士だけで遂行されるものではない。見えづらいこまかいもの、人のうごき、小さなこと、そうしたものを描いた作品として、戦争文学があり、開高の一連のルポルタージュ、そして小説があるといえる。

戦争文学について、いいだももと大岡昇平の対談では、戦後文学の出発当初のときの文学理念にあった「全体小説的」¹⁵なものがあるという。そしてそのような小説は再現し出しているといいだは述べる¹⁶。

では、開高の作品で、このような「全体小説」に該当する作品があるだろうか。「闇三部作」は、一冊ごとではベトナムの全体を表現しえるような作品になっているだろうか。小田実は、開高の作品は、開高も読者も「ベトナム」にかかわってのまろもろを多かれ少かれ心得ている」（小田 1991：201）から理解できるものであり、それを知らない「今の若い世代はどう彼の作品を受けとっているのか」（小田 1991：201）と指摘している。

辺見庸は、たとえば小さな武器について次のように発言している。辺見が共同通信の記者としてカンボジア取材時のことである。

そもそも敵対の大もとをつくった諸国のうち経済先進国は、遺恨の始末を怠ったまま、自国兵器を近代化してきた。つまり、悪意を「洗練」してきた。地雷などのように、見端のよくない露骨な悪意は途上国に放置したまま、である。

（辺見 1998：61）

洗練された兵器、たとえば核兵器がある一方で、露骨な悪意たる前近代的で洗練されていない武器としての地雷は放置されたまま残る。どちらが一般人にとって直接の脅威なのだろうか。当然人命を脅かす兵器としてはどちらも脅威だが、地味で小さく目立たず、しかし強力かつ直接的な兵器が世界中に散在しているのだ。

辺見はこのエッセイを「悪意の哲学」としている。最大の悪が核であったとしても、「悪」は大きな兵器だけのものではなく、小さな武器においても存在するであろう。カンボジアの地雷の例は、このような武器による犠牲と、それらを放置したままでは、大きな問題としての核を語ることができないことも意味するだろう。

全体小説が文学上、作家の理想であったとしても、読者が読みとろうとするのは全体だけではないだろう。戦争を主題とする全体小説であっても、「全体」という大きな概念では理解できない小さな武器、ひと、こと、もので構成されているからである。開高の全体小説ではない「戦争文学」におけるまなざしからは、こうした全体ではない細かい小さな出来事、犠牲者の存在を読みとることができるのではないか。

15 （大岡・いいだ 1969：223）

16 （大岡・いいだ 1969：223）

第七節 アジア・太平洋戦争後の「戦争文学」について

これまでみてきたように、大江と開高は、主題は異なるものの、戦後20年を経過した時点から、戦争のさまざまな側面を作品として残してきた。ここでは「戦争文学」について、あらためて考察してみよう。

大江は戦後文学の正当な継承者であることを自認している。また開高は『紙の中の戦争』のなかで、おもにアジア・太平洋戦争における戦争文学を評論している。大岡昇平をはじめとする戦後文学者の作品も批評の対象になっているが、大江はあるエピソードを紹介している。

僕はかつて、焼跡育ちのひとりの作家がヴェトナムにおける戦争に「従軍」してかえったあと、その昂奮のさめやらぬままに現実の戦争の経験を独占しているように語って、野間宏の眼に憤りの炎を燃えあがらせるのを見たことがあった。おなじ作家が大岡昇平をもまた激怒させる一瞬をもった、という噂を聞いたこともあった。それはじつのところ不幸な行きちがいにすぎなかった。この作家は、ほかならぬ野間宏、大岡昇平とともに敬愛することあつい人間であることがあきらかなのであったから。(大江 1970 : 242)

名前は書かれていないものの、これは開高のことであろう。ベトナムを取材した作家といえば先述した日野啓三がいるが、焼跡育ちということは明確にはしていない。日野は取材当時、読売新聞の記者であり、サイゴンを拠点としてベトナム各地をまわったが、従軍取材はしていない¹⁷。ベトナムに朝日新聞特派員として「従軍」し、「ネコがシャクシをかついで“ヴェト

ナム”、“ヴェトナム”と叫ぶのであった。それは一つのパニック現象であった」(開高 1974 : 271) 日本において、現実の戦争であったベトナム戦争の経験をまさに独占的に語ったのは、ベトナム戦争を取材した多くの人びとのなかで考えられるのは開高以外にいないだろう。

大江はつづけて、

ただ、こうした行きちがいのあらかず唯一のたしかな意味は、われわれ戦後に育った者には、眼の前でおだやかに微笑している年長者が、激しい戦闘のうちに「前線の辛さ」をかみしめた生き残りだ、ということを実感するための想像力をみずみずしくしたもつには、日々の努力が必要だということにほかならない。

(大江 1970 : 242)

「生き残り」ということばには、直接は第二次大戦において生還した年長者たる野間、大岡をさしている。しかしヒロシマを取材した大江は、被爆から生還した人びと、知識人だけではなく多くの一般市民たちの沈黙を見た。この沈黙自体を大江が伝えることによって、逆の効果として多くを語らせ、被爆者たちが生還をかみしめて生き続けたことも背景にあると考えてよいだろう。大江は、前線の辛さとともに、戦死、被爆死することなく生き残ることの苦さをかみしめ、尚早にことばにすることを戒める、戦後派作家の憤り、激怒を感じとったのだといえる。

ただ「不幸な行きちがい」とはなんであろうか。「生き残りだと実感する想像力」によってしか、戦争の経験をことばにできないのだとすれば、戦争体験のない人びとは、その資格がないといわざるをえなくなるのだろう。

復員した大岡昇平は、小林秀雄の「満州の印

17 このあたりは日野(1966)に詳しい。

象」に影響を受けたという¹⁸。小林は戦中、文藝春秋社特派従軍記者として、ときには林房雄とともにたびたび満州を訪れているが、その時の印象を記したものがこの作品である。

このなかで小林は、

——中略——人間は戦ふまで戦といふものがどういふものか知らぬ。どんなに戦の豫想に膨らんだ人もほんたうに剣をとつて戦ふまでは平和たらざるを得ない。人間は戦ふ直前に何か知らない一線を飛び越える。(小林 1978: 19)

小林は日野や開高、石原と同じように戦闘員としてではなく、特派員として取材している。だが大岡や野間宏のように、戦後派とされる作家がのこした戦争文学は、戦闘員として戦ったという体験がある。戦後派の作品において、創作がどこまでかは推論するしかないが、こうした体験の有無がどのように文学としてあらわれるか、体験者でないものに戦争に関する文学は書けないのだろうか。

竹内好は1961年11月にアジア・太平洋戦争における戦争体験について、「戦争体験なるものは体験者によっても特殊化される傾き」(竹内 1961: 3)がある、という。こうした特殊化がまねくものを次のようにいう。

あらゆる体験と同様に戦争体験もまた、それを特殊のワクに閉じこめて、一般性への解放を怠ったのでは、そもそも体験の意味をなさない。利用できる現在形に書きおしてはじめて体験は体験たらしめられる。(竹内 1961: 4)

と述べる。また「戦争体験の閉鎖的な自己主張の方向からは、体験は一般化されず、したがって正しくは体験化されないのである。」(竹内

1961: 4)とも述べる。このような問題によって戦後派文学は「やがて交替または変質を余儀なくされ」(竹内 1961: 4)たとも述べる。

竹内が問題としているのは、戦争体験者の体験は、体験者にとって特殊な、閉鎖的なものとなっていき、それが戦後文学の閉塞をまねいたことだ。体験が多くのひとにとって意味あるものでなければ、あくまで個人の体験に終始することになる。そして、このような特殊、閉鎖的な「体験」では、多くの人びとに反戦を呼びかける力にはならないということであろう。

戦争体験といっても、第二次大戦の経験と、ベトナム戦争の経験のちがいが、自国の戦争と他国の戦争というちがいがあがある。竹内の指摘を第二次大戦後の「戦争体験」に適用するのは無理があるかもしれない。ただ大江は竹内の指摘にしたがえば、閉鎖性、特殊化を避けて、ヒロシマの体験を共有できる概念とした。開高はその反対に、ベトナム帰国後は共有しようとしたが、その後はむしろ特殊なもの、自分のための経験としてしまったともいえる。

戦争体験が一般化されたとしても、局地戦、ゲリラ戦といった違う要素が入り込むのであれば、それは更新されなければならない。核問題は大きな問題だが、個別の体験、小さな武器を手取る人びと、そうしたものをも取り込まなければ、ヒロシマという概念、ひいては戦争体験の共有や一般化も、空疎なものとなるのではなかろうか。大江の『ヒロシマ・ノート』は絶対悪としての核兵器を提示しているが、戦争の要素はそれだけではない。開高の作品も小さなものへのまなざしという戦争の一側面を提示したが、核の問題は主題にはなっていない。

本稿におけるこれまでの考察をふまえると、

18 (大岡・大江 1983: 11)

竹内の指摘は、第二次大戦以降の大江や開高の作品をとおして、これらを包含した形のあらたな戦争概念、「一般性への解放」が必要とされている、と新たに読みなおす必要があるのではないか。竹内のいう戦争体験の一般化という課題について、最終節で考察していこう。

第八節 「大」,「小」すべてに「想像力」を ——むすびにかえて——

小説家は政治家でもなく、軍人でもない。そのことをよく理解して、戦争、ヒロシマ、沖縄といった問題に取り組んだのが大江だった。大江は書斎を出て、問題の現場を観ることによって、「想像力」を強化し、作品を発表したのが大江であるともいえる。

大江はほんものの戦場を訪れることはなかった。だが大江は、「想像力」によって戦場の経験の有無を克服しようとしたといえる。ベトナム戦争を取材した開高は生死を賭けた。

開高は、地元の新聞に掲載された記事、米軍のブリーフィング、そして彼が目撃したひと、こと、ものを、発表どおり、見たとおりを書く。

従軍記者が事実を書くのは当然なのだが、特派員としてだけでなく、一人の小説家としての側面も垣間見ることができる。たとえば自身の第二次大戦の回想や感想、日常のほんのささいな出来事をも描く。日野にいわせれば「素人的な突っこみの感覚と表現」(日野 1966: 271)だが、特派員の眼のみではない、空襲や機銃掃射といった、第二次大戦を経験した一人の小説家としての開高の眼をとおしたものとなっている。

しかし大江のように、一人の日本人として、という視点や、同じアジア人として、という視点、アメリカの核の傘にあり、ベトナム戦争の、

現代においては東南アジア広域の最前線となっている沖縄について語る、ということはない。

『サイゴンの十字架』のなかで開高は、

——中略——彼らは死ぬまで離脱できず、選択もできず、賭けとってはコオロギの喧嘩だけである。(開高 1973: 111)

「彼ら」とは南ベトナムの人びとのことである。彼らの立場を思いつつ、戦争が終わるまで、あるいは戦死するまでそこから逃れることができない。それは彼らが戦争の当事国の当事者であるからだが、開高自身は、

——中略——いまとなつては、自分が、旅行者にすぎなかったと、いえそうである。航空券をポケットに入れていた私はアメリカ兵やヴェトナム兵と某日、生死をともにしたけれど、やはり彼らを理解できなくていたのではあるまいか。

(開高 1973: 111)

と述べる。三度ベトナムを取材しながらも、理解できなかったという。ベトナムを取材したとしても「非当事者」である、とした開高自身の心情のあらわれた一節であろう。

開高はベトナム反戦運動には関わったが、のちに退いていく。講演などでは言及するものの、『サイゴンの十字架』を境にルポルタージュや、ジャーナリズムの一環としてベトナムを描かなくなった。

一見すると自身の内部に閉じていった、ともいえるが、完全に閉じたわけではなく、小説として書くのが一番伝わりやすい、ということなのであろう。伝えたいものが変化した、ともいえる。

開高は「大きな単位のことば」¹⁹という表現

19 (小田・開高 1973: 143)

で政治や国家などを語ってきたという。こうした言葉では、自らが伝えたいことは伝わらない。この理由として考えられるのは、ある程度の党派性を帯びたことばで、政治を語り、思想を語らざるをえない「大きな単位のことば」が、開高にとっては「自らのことば」ではない、と判断したからかもしれない。

「大きな単位のことば」は開高以外の人物によっても新聞、雑誌、テレビといったマスメディアを通じて伝えられた。第七節で述べたところの、開高のいう「一つのパニック現象」だが、このような言葉では聞き流され読み飛ばされ、戦争報道に慣らされていくことにつながる。この「慣れ」については、たとえばスーザン・ソントグも、

——中略——映像が充満した、否充満しすぎた世界において、われわれにとって重要であるべき映像のインパクトは弱まりがちである、つまりわれわれは冷淡になる、ということである。過剰な映像はついにわれわれの感じる能力を減じ、われわれの良心を刺激することが少なくなる。

(ソントグ 2003 : 104)

と述べる。彼女が言及したのは戦争写真やテレビについてである。テレビの視聴者は、

——中略——何度も何度も刺激され、はっと驚く経験をさせられることが必要なのだ。内容はそうした刺激の一部にすぎない。内容により深くかわるためには、或る種研ぎすまされた意識が必要である。そのような意識こそ、メディアが流布する映像に付随する予測のために弱められ、メディアが映像の内容を濾して取り去るために鈍化されるものなのである。(ソントグ 2003 : 105)

と述べる。

文学に当てはめれば、戦争の記述が繰り返されると、読者は「慣れ」によってその記述が日常の一コマとなる。戦争の記述は内容が問われ

ることなく、考察のための情報ではなく、単に消費されていくということになるだろうか。

戦争報道の「消費」は現在でも続いていることだが、消費は次なる消費を呼び、今日のニューズが明日には古いものになる。情報は上書きされ、時間の経過とともに忘れられていく。

読者、視聴者がベトナムに「慣れ」ていったとしても、第四節であきらかにしたように、開高には忘れられないひと、こと、もののイメージが生涯つきまとっていた。忘れられないものを書くために、ルポルタージュという、文学の一つのジャンルではあるものの、こうした形式では、開高にとって忘れられないことが伝えられなかったのだろう。

開高は「自分がかつてむちゃくちゃな、でたらめな大きな単位のことばで書いたことばを、こまかく、こまかく分割していこうと思う。」(小田・開高 1973 : 143) という。開高のこうした姿勢は、前節における竹内のいう、体験の特殊化というより、これまであまりに大きな言葉で語られてきた戦争の要素を詳細に検討する、というのが開高の方法であったのではないだろうか。

一方大江は核の傘、ヒロシマ、沖縄という要素を点と線でむすびながら、それらがすべて現在の日本につながり、からまっているのだ、という。そして日本人が「核戦争時代」とどう向き合うか、という問題へとつなげてゆく。彼のいう「想像力」によって、核、ヒロシマ、沖縄への複合的なまなざしを、現代の日本人がもたねばならない、ということだろう。

大江の根底にあるのは核兵器を「絶対悪」として、保有にも使用にも反対するという考えであった。こうした考えは被爆者に限定される者ではなく、日本人がもつべきであり、きわめて

原始的なモラルやヒューマニズムにしたがえば、当然のことであろう。こうして大江は人間、世界、戦争における人間性、大江のことばでは「威厳」という大きな視点で言及してゆくのである。

本稿では詳細に検討できなかったが、石原慎太郎は1967年、読売新聞社特派員として従軍取材をしている²⁰。石原によると、彼の愛した旧南ベトナムが、歴史の流れのなかで当然ある戦争に巻き込まれ、崩壊していく過程を現地において見た。そして石原は政治の道へと進んでいく。政治、思想といった大きな言葉の世界へと彼は向かっていった。

大江の、かつての戦争、核戦争という課題へのアプローチは、強靱なる「想像力」によって大きな概念へ、反戦、護憲と向かっていった。開高は、ベトナムで従軍しながらも理解できなかったかもしれない、としながらも戦争取材を70年代まで続けた。反戦運動を離れた後も、小さなものへの視点を忘れなかった。

大江、開高の作品の考察によって、文学者が語る戦争の諸側面の一端があきらかにできたとと思う。とりわけ、技術革新による小さな犠牲者の見えづらさを考慮すると、開高の作品には犠牲者の血のにおい、戦争が日常になった際の、身近な人びとの死を読みとることができるだろう。ただそれも、大江のいう「想像力」をはたらかせ、「想像力」を絶えず更新することによってあらたに問い直す行為あつてのものかもしれない。

引用文献

- 石川文洋 (2015)『フォト・ストーリー 沖縄の70年』、岩波文庫
- 石原慎太郎 (2013-a)「国家なる幻影（上）ベトナムから政治へ」『石原慎太郎の思想と行為 第1巻 政治との格闘』、産経新聞社
- 石原慎太郎 (2013-b)「石原慎太郎 年譜」『石原慎太郎の思想と行為 第8巻 孤独なる戴冠』、産経新聞社
- 浦西和彦 (1990)『開高健書誌』、和泉書院
- 大岡昇平・大江健三郎 (1983)「追悼 小林秀雄 伝えられたもの」『文學界』第37巻5月号、文藝春秋社
- 大岡昇平・いいだもも (1969)「対談 転回期としての戦後」『文芸』第8巻第4号、河出書房新社
- 大江健三郎 (1963)「ぼく自身のなかの戦争」『中央公論』第78巻第3号、中央公論社
- 大江健三郎 (1965-a)『ヒロシマ・ノート』、岩波文庫
- 大江健三郎 (1965-b)「中国核実験への影響 アメリカの百日（下）」『毎日新聞』11月3日夕刊、毎日新聞社
- 大江健三郎 (1970)「大岡昇平・死者の多面的な証言——同時代としての戦後2」『群像』第27巻第2号、講談社
- 大江健三郎 (1991)『厳肅な綱渡り』、講談社文芸文庫
- 大江健三郎 (2018)「初出一覧」『大江健三郎全小説3』、講談社
- 小田実・開高健 (1973)「文学は魅り得るか」『群像』第28巻第9号、講談社
- 小田実 (1991)「『その後』の『戦争文学』——野間宏の場合——」『群像』、第46巻第7号、講談社
- 開高健 (1961)『過去と未来の国々 中国と東欧』、岩波新書
- 開高健 (1970)「紙の中の戦争〈連載第十四回〉——『生きてゐる兵隊』の場合〈承前〉」『文學界』第24巻8号、文藝春秋社
- 開高健 (1973)『サイゴンの十字架』、文藝春秋社
- 開高健 (1974)「頁の背後11」『開高健全作品 エッセイ1』、新潮社
- 開高健 (1979)「戦場の博物誌」『文學界』新春特別号、文芸春秋社
- 開高健 (1988)「開高健・人と作品」『昭和文学全集 第22巻』、小学館

20 石原の年譜は石原 (2013-b) を参照した。

- 小林秀雄（1978）「満州の印象」『新訂 小林秀雄全集第七巻 歴史と文学』，新潮社（初出は『改造』1939年1, 2月号，改造社）
- スーザン・ソントグ（北條文緒訳）（2003）『他者の苦痛へのまなざし』，みすず書房（*Susan Sontag (2003) Regarding The Pain of Others*）
- 竹内好（1961）「戦争体験の一般化について」『文学』第29巻第12号，岩波書店
- 日野啓三（1966）『ベトナム報道 特派員の証言』いるか叢書3，現代ジャーナリズム出版界
- 辺見庸（1998）『眼の探索』，朝日新聞社